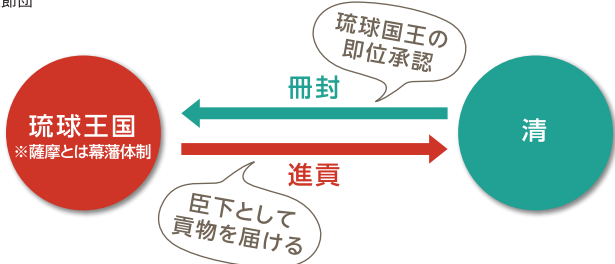




冊封使節団



組踊は琉球と深い関係にあった中国の皇帝からの使節を歓待するために、玉城朝薫によってつくられた楽劇で、1719年に初めて演じられました。琉球の国劇ともいわれ、琉球王国時代から現在まで、連続と受け継がれています。



中国皇帝が新しい琉球国王を認めるために派遣した使節(冊封使)は、帆船で往来するため、風を待つて半年ほど琉球に滞在しました。その間に七つの宴が催され、玉城朝薫はこの形式を整えたとされます。宴では歌舞だけでなく、首里城近くの池に船を浮かべたり、仕掛け花火を披露したりと趣向が凝らされました。歓待の様子は、北京の故宮博物院所蔵の「冊封全図」と「琉球全図」に考察を加えた『冊封琉球全図 一七一九年の御取り持ち』(国立劇場おきなわ監修・雄山閣)に詳しく書かれています。「御取り持ち」とは、「おもてなし」のことです。

組踊は宴の一つ「重陽の宴」で初演されました。今公演でも上演される「執心鐘入」と「二童敵討」です。同じく「朝薫の五番」に数えられる「孝行之巻」「銘苺子」「女物狂」もほかの宴で上演されたと考えられています。観覧する冊封使一行には、芸能番組を解説した文書が提供されました。例えば「執心鐘入」なら、主な登場人物である「中城若松」と「宿の女」の出自など、舞台を見ただけでは分からないことも記されています。パンフレットを頼りの観劇は、現代の観客とも似ている気がします。

琉球は、1609年の薩摩侵攻によって、中国の冊封体制と日本の幕藩体制との間で揺られていきます。その中で王府の儀礼としての芸能の上演は、琉球の独自性と儒教を尊ぶ国であることを示す狙いがあったとされます。組踊は国家プロジェクトで、玉城朝薫は国王から重い仕事を命じられていたのです。

しかし、今回の公演の原作「花の碑」の作者・大城立裕さんは「芸術のジャンルを創造するのに、国王の命のみで可能だとは思えない」と記しています。日本復帰前の琉球政府時代から行政の要職を務める一方、沖繩初の芥川賞作家になるなど芸術の道を歩んだ大城さんの言葉だけに重みがあります。脚本・演出の嘉数道彦さんは「花の碑」を演劇化した「風花」に出演、大城さんが組踊誕生を題材に脚本を書いた「今日ぬ誇らしや」では国立劇場おきなわの芸術監督として演出を手がけました。琉球王国の滅亡や沖繩戦などさまざまな困難をこえて沖繩の人々に大切にされてきた組踊の誕生を描く朗読劇の初演。公的な場の要請に応えながら、自身の芸術家としての信念も譲らない2人の姿は、玉城朝薫と重なるようにも見えるだけに、組踊の始祖と後継者の交感に期待が高まります。

文／真栄里泰球(沖繩タイムス記者)

朗読と組踊

琉球楽劇の創始者
玉城朝薫が紡いだ歌舞

- 第一部 朗読劇「國戯誕生～玉城朝薫が紡いだ歌舞～」(昼・夜 共通)
原作:大城立裕「花の碑」
脚本・演出:嘉数道彦
振付:玉城匠、音楽:仲村逸夫
- 第二部 (昼)組踊「執心鐘入」
(夜)組踊「二童敵討」

10/6
水
昼14:00
夜18:30

※公演開催についての最新情報は
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。



© 大城洋平

組踊「執心鐘入」(琉球横笛「入嵩西論独演会」清風の音より)